

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2026年(令和8年)
4月5日 第755号



PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

公民館図書室には約2万5千冊の蔵書があり、「市民の本棚」として利用していただけるよう、一人でも気軽に利用できる場として運営しています。新聞の閲覧や、本・雑誌を借りることができます。

公民館では市民の皆さんが参加できる講座や催し物を随時行っており、そのテーマ・内容に関連した本を優先してそろえています。公民館主催の講座や市民の学びと密接に結びついていることが、公民館図書室の特徴です。



公民館図書室をご利用ください

—市民の本棚として公民館活動の資料室として—

●図書室のつどい

毎月1回開催しています。文学・社会科学・自然科学・時事問題等、様々なテーマの本を取り上げ、著者や関係者に来ていただき、お話を聞く催しです。
著者のお話を直接聞くことで、そのテーマ・課題への関心や理解がより深まります。

●図書室月報の発行

ご覧になっているこの「図書室月報」は、公民館図書室の利用者や講座参加者に原稿を寄せていただき、掲載しています。最終ページの「私の本棚から」は、お一人に6回連続で、興味を持った本などについて、感想や紹介を書いてもらっています。

紙面を通しての交流や学び合いの場となるよう毎月発行しています。バックナンバーを図書室やホームページで読むことができます。



●市民グループの発行物・ミニコミ収集

市内で活動するグループや団体が発行しているチラシ・冊子等のミニコミ誌を収集して、閲覧できるようにしています。様々な市民活動を集積・記録し、共有するという公民館図書室独自の役割として行っているものです。

グループ活動で発行・出版したものがありましたら、ぜひ図書室にご寄贈ください。

●くにたちブッククラブ

年間のテーマを設け、日本文学から8作品を選び、参加者の「読み」の発表と講師の講義で進める読書会です。

2026年度は「なぜ、その道を選んだのか」をテーマに開催します。今号2ページ目に年間の予定を載せています。



公民館図書室の本や雑誌を借りたいときは？

本や雑誌を借りるためには、

「くにたち図書利用カード」が必要になります。

- ☆ くにたち図書館のカードをお持ちの方は、そのままお使いください。
- ☆ カードをお持ちでない方は、新たに登録をする必要があります。
住所が確認できる健康保険証、運転免許証などをお持ちください。
- ☆ 国立市に在住・在勤・在学の方、国分寺、府中、立川、日野の市民の方は本を借りることができます。
- ☆ カードは5年ごとに更新が必要です。

※詳しくはお問い合わせください。



—くにたち電子図書館—

国立市に在住・在勤・在学の方で、図書利用カードをお持ちの方は、パソコン・スマートフォン・タブレットなどから利用できます。

ブッククラブから

あとがき

城内 亜紀子

(文学講座連絡会編集委員会)



2025 年度くにたちブッククラブの文集は、
講座参加者の感想を中心にまとめられています。
ここでは城内亜紀子さんが書いてくださった
「あとがき」の文章を紹介いたします。

本屋の閉店に歯止めが効かず、読書離れが言われて久しい
一方で、『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』という
タイトルの本がベストセラーになるほど、本当は皆、本を読
みたいと思っているのかもしれない。それがいまのちよっ
とした読書会人気につながっているのでしょうか。

私は今年初めて、一年を通じてブッククラブに参加しまし
た。他人のレビューがすぐ目に入る時代に自分の言葉で感想
を表現することの難しさを痛感します。毎回丁寧に作品を読
み込み感想をまとめて来られるベテラン参加者の真摯な姿勢
には頭が下がります。他の文学作品や映像・舞台作品と結び
付けて話される感想にはその方の経験の豊かさが垣間見え
ます。くにたちブッククラブの醍醐味はなんと言っても日本
の近現代文学を専門とされる講師の方々の解説でしょう。構
造的、同時代的な視点を与えてくださり、作品の様相が一変
することもしばしばで、自分の読みの甘さが恥ずかしく日を
置かず再読したこともありました。また課題作品ゆかりの地
を訪ねる文学散歩は、著者や主人公と空間を共有することで
作品世界への想像を膨らませる格好の機会となりました。溢
れるコンテンツの中でもとすると量を消費することに意識
が偏っていた自分にとって、こうした多層的なアプローチは
本との向き合い方を変え、とても充実した贅沢な一年となり
ました。

12 月の課題図書であった『夢見る帝国図書館』(中島京子 著)
は、国立図書館の歴史をテーマとした作品です。帝国図書館

は 1872 年湯島聖堂に設置された書籍館に端を発し、寛永
寺の跡地の上野へ移転して、戦後の 1947 年まで続きます。
永井久一郎や田中稲城などの人物が戦前戦中と予算削減や災
害危機と戦いながら国家の「知」を守るべく奔走し、そこ
は樋口一葉、森鷗外、夏目漱石、谷崎潤一郎、芥川龍之介、
宮本百合子など多くの文豪が出入りし、読み手が書き手にな
るのを見守ってきました。この図書館に出入りしたのはそう
した文豪だけでなく、戦地で接収された外国書籍や思想言論
の統制で禁書処分となった書籍も含まれます。戦中は図書館
の中立性が変化しながらも、戦禍から書籍を疎開させ、戦時
下にあっても閉館を許さなかったところには知の門番として
の矜持を感じました。この図書館の歴史には書籍に対する
人々の憧れや情熱そしてリスペクトがあります。

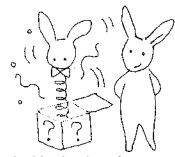
翻って、くにたちブッククラブの歴史ももうすぐ 50 年を数
えるそうです。いま手元にある歴代の課題図書のリストを眺
めると、その長さにこの地域に脈々と流れるコミュニティの
力強さが感じられ溜息が出ます。繰り返し取り上げられる明
治大正昭和の作家に混じって、現代の若い作家の作品が点在
し、これから先にはそうした作家の名が複数回連なっていく
のでしょうか。なぜその年にその作品が取り上げられたのか、
一つの作品が時を経てどういう文脈で読まれるのかなどとて
も興味深いです。作品を生み出す書き手が偉大であることは
もちろんですが、作品を大切に継承していく読み手の側も、
文化の担い手として同様に偉大と言えるかもしれません。

ぜひ文集をお手に取ってご覧ください

国立市公民館では、毎年様々な日本文学を共同で読む「くにたちブッククラブ」という講座を実施してい
ます。1 年の締めくくりとして参加者と共に文集を作っています。昨年度は下記の作品について取り上げ、
参加者の方々の作品の感想を文集に掲載しています。また、昨年度の文集では小山田浩子『工場』の解説を
してくださった講師・深津謙一郎先生の講義録も掲載しています。図書室で無料で配布しています。

三島由紀夫『金閣寺』 (新潮文庫)	中島京子『夢見る帝国図書館』 (文春文庫)	小山田浩子『工場』 (新潮文庫)	村田紗耶香『コンヒ二人間』 (文春文庫)	織田作之助『夫婦善哉』 (新潮文庫)	有吉佐和子『青い壺』 (文春文庫)	栗代雄介『旅する練習』 (講談社文庫)	森鷗外『舞姫』 (新潮文庫)	昨年度取り上げた作品
------------------------	----------------------------	-----------------------	---------------------------	-------------------------	------------------------	--------------------------	---------------------	------------

文集できました！



文集をお読みに
なりたい方は
公民館図書室まで
お越しください。



国立市公民館主催・文学講座 くくにたちブッククラブ

ーなぜ、その道を選んだのかー



▲詳細HP

私たちの毎日は選択の連続です。その選択には必ず理由が存在します。一見不合理ともいえる行為の奥底にも、その人なりの理由があるのです。社会はあまりにも分断されてしまっていて、他者の行為に対して理解しようとする心があらかじめ塞がれてしまっています。自分とは異なる価値観をもつ他者の選択の理由を

「文学」を通して考えてみる、というのが今年度のテーマです。自分では絶対に選ばない道を、ためらいもなく進んでいく作中人物から受け取る心のざわめき、不穏な感動……。そんな自分の読書体験について語り合しましょう。(講師の山岸さんからの言葉) 今年はこの作品を読んでいきたいと思います。ぜひご参加ください。

月日	作品	講師
5 / 14 (木)	芥川龍之介『藪の中』(新潮文庫) ※文庫の書名は『地獄変・偷盗』上記文庫の中に収録	山岸 郁子 (日本大学・日本近代文学)
6 / 11 (木)	羽田圭介『スクラップ・アンド・ビルド』 (文春文庫)	深津 謙一郎 (共立女子大学・日本近代文学)
7 / 9 (木)	朝比奈秋『植物少女』 (朝日文庫)	尾崎 名津子 (立教大学・日本近代文学)
9 / 17 (木)	野上弥生子『真知子』 (ちくま文庫)	小平 麻衣子 (慶應義塾大学・日本近代文学)
10 / 8 (木)	高瀬隼子 『おいしい』ほんが食べられますように』 (講談社文庫)	大木 志門 (東海大学・日本近代文学)
※11月(木)	市川沙央『ハンチバック』 (文春文庫)	榎本 正樹 (文芸評論家・現代日本文学)
※12月(木)	桐野夏生『日没』 (岩波現代文庫)	佐藤 泉 (青山学院大学・日本近代文学)
1 / 14 (木)	武者小路実篤『友情』 (新潮文庫)	大野 亮司 (亜細亜大学・日本近代文学)

とき 夜7時半～9時半(12月は夜7時～9時)
ところ 公民館 3階講座室 定員 30名
申込先 4月14日(火)朝9時
電話またはホームページより
公民館 ☎042(572)5141



▲申込フォーム

★参加者多数の場合、市内在住・在学・在勤の方を優先することがあります。
※11月・12月は、市民文化祭の日程が決定次第お知らせします。

くくにたちブッククラブに 参加してみませんか?



国立市公民館では、毎年様々な日本文学作品について共同で読む「くくにたちブッククラブ」という講座を実施しています。講座では毎回、取り上げた作品の感想を参加者で共有し、講師に作品の解説をしていただきます。課題図書は、毎年参加者と講師、職員が話し合いながら決めていきます。

気になる作品の回だけ参加するのモアリ! 年間通して参加すれば、文学についてより深く学べることも間違いなし! まずはお気軽にお問い合わせください。

○各回の流れ

前半1時間: 参加者の感想の共有。

後半1時間: 講師から作品についてのお話

※前半と後半は入れ替わることがあります。

講座終了後には、参加者1名にその回の感想文を書いていただきます。感想文は図書室月報に掲載されます。

○年間スケジュール

5月～1月 「くくにたちブッククラブ」 各回実施

12月中旬～1月中旬

来年度取り上げたい作品のアンケート受付

1月中旬頃 参加者と職員による今年度の振り返り、来年度の作品についての話し合い

2月中旬頃 来年度の作品についてブッククラブアドバイザーの講師を交えた話し合い

○文集を作っています!

その年に取り上げた課題図書についての感想文を掲載する文集を作成しています。一年の締めくくりに文集づくりに参加して、より一層学びを深めましょう。

※文集作成への参加は任意です。

※文集作成への参加は任意です。

※文集作成への参加は任意です。

図書室のしおり

ある日、森の中でクマさんの ウンコに出会ったら ーツキノワグマ研究者のウンコ採集フン闘記ー

お話 小池 伸介 (東京農工大学)

クマはアニメや絵本に出てくるようなかわいさを愛されたかと思えば、近頃では日本の山村で過疎化が進み、クマとの遭遇が日常化し、世間を騒がせることも多くなりました。クマは先行研究が少なく、小池さんは糞を採集することでその生態を調査してきました。そのために、森の中の道なき道を行き、ロープを使って崖を下ったり、吹き矢でクマを眠らせたりと、まるで探検家のようなフィールドワークを重ね、クマや他の生き物が絶妙なバランスで関係しあっていることを明らかにしました。

クマをはじめ森の生態系全般の専門家でもある小池さんに、クマの生態や野生動物と人間の関係などについてお話を伺います。

〈小池さんの本〉表題作 (辰巳出版)

とき 5月16日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 4月8日(水) 朝9時〜

電話またはホームページより

☎ 042(572)5141



〈私の本棚から 第1回〉

原田ひ香 著

『三千円の使いかた』

高遠 敬子



「三千円の使いかたで、人生が決まる」主人公の祖母が小学校3年生の孫、美帆に話すシーンからこの物語は始まる。実は、私は図書館で15年以上、主婦の節約雑誌を借りて読んでいた。節約に興味を持ったのは、二十代の頃ニューヨークで暮らしていた時に薄給のため貧しい生活だったのがきっかけ。スマホも無い1990年代。安いスーパー、安い惣菜、安いコーヒー、とにかく極貧生活を送るために、あらゆる節約を試していた。この頃、この本を読んでいたら、私の当時の生活も変わっていたかもしれない。そんなことを思いながら読み進めていた。

この物語には、三世代の女性が登場する。孫の美帆、姉の真帆、母の智子、祖母の琴子。それぞれの人生とお金との向き合い方が描かれていく。美帆は、大学を卒業したばかりの新入社員。憧れの一人暮らしを始め、彼と将来のことで意見が合わずモヤモヤしていた。そんな時保護犬のことを知り、彼女は一大決心をする。家を買う、犬を飼う。その目標の為に節約を考える、元証券会社に勤務していた姉に相談する。

姉の真帆は、専業主婦。高校の頃から付き合っていた旦那さんと3歳の娘の三人暮らし。真帆は、娘の教育資金をコツコツ貯められるしつかり者。姉から様々な節約法を聞き、一つ一つ試す美帆、彼女は徐々に変化していった。

73歳の祖母琴子は、亡き夫が残した遺産と年金で質素な生活を送っていた。そんなある時、智子にお願いされた料理教室の講師となったのがきっかけとなり、社会との結びつき、人に求められる幸せを感じ、働くことを決心する。体力のこともあるが、高齢者でもできることを求める彼女の姿に「生きる」意味を考えさせられた。

琴子の話す家計簿の話も興味深かった。琴子の母親、そのまた母親も昭和18年と終戦の20年以外、ずっと家計簿を付けて続けた。この頃、婦人之友の「家計簿をつけ通す同盟」という運動が終戦の翌年に起きていた。家計簿を付けて提出し、様々な統計を出していくという運動である。戦後の復興はこうした家計簿の力もあったのかもしれない。記録、集計、分析、プランニング、実行力、どれも家計簿には人生を形作る大切な要素がある。

この物語の後半は、智子の友人の熟年離婚による財産分与の男女差や、手術による健康面や、晩年の夫婦のあり方など多岐にわたっていく。

お金という道具を使って、どう自分の人生の未来を切り開いていくのか。『三千円の使いかた』この本を読んで、改めて深く考えさせられた。三千円、何も考えずに使っていくのか、未来を見据えて使っていくのか。三千円の使いかたで、人生が決まる」主人公の祖母、琴子のセリフがこたえました。(中央公論社)

係から

今月から、高遠さんの「私の本棚から」が始まります。毎回その本に合わせたイラストも描いてくれる予定です。どうぞお楽しみに。

